

書 評

木村周平. 『震災の公共人類学—揺れとともに生きるトルコの人びと』世界思想社, 2013年, 312 p.

市野澤潤平*

本書は、「震災の」人類学と銘打ちながら、地面が揺れたその瞬間、および直後の混乱と悲劇を、描き出そうとするものではない。本書の舞台であるトルコは、震災に繰り返し見舞われ続けてきた。近年では、1999年に生じたふたつの大地震により、合わせて2万人近い犠牲者を出した。著者が本書に結実する調査を開始したのは、それらの悲劇から5年を経た2004年である。また、主たる調査地として選んだのは、地震による被害が顕著であったコジャエリまたはデュズジェではなく、その隣県にあたり、1999年の地震を引き起こした「北アナトリア断層」の西端に位置する、世界有数の巨大都市イスタンブルである。

将来的に大きな地震に襲われる可能性が高いとされるイスタンブルの調査を通じて著者が描き出そうとするのは、狭義の〈震災〉—地震による物理的な衝撃（およびその直接的な帰結としての〈被害〉）—ではなく、〈地震の後〉であり、〈地震の前〉であり、〈地震の周辺〉である。「近い過去に起きた地震と、近い将来に起きると言われている地震の間」（p. 3）に焦点を定めることにより、本書は

問わず語りのうちに、震災（そして災害一般）を優れて長期的、複合的、広域的な過程として捉える視野を、著者が目指す「震災の公共人類学」の基底条件として、提示する。ゆえに本書の記述は、参与的な調査に立脚した細密な描写を基盤としつつも、100年以上のタイムスパンと、日本を含めた複数の場所を、縦横に移動する。イスタンブルで見聞きした出来事が題材である（またときに〈トルコのな〉価値観や意味世界への言及がある）にも拘らず、いわゆる〈民族誌的な〉テキストが本書には希薄であると、読者は感じるかもしれない。そうした本書の性格は、ひとつには上記のような震災の捉え方ゆえであり、もうひとつには、震災を描こうとするうえで、の著者の特徴的な態度に、起因している。

本書は、「揺れとともに生きるトルコの人びと」という副題をもちながら、単に〈トルコ（人にとって）の震災〉を描写説明しているのではない。著者は、「彼ら・彼女らは私たちと同じ問題に取り組む者たちなのであり、その経験を通じて／とともに考えられることは少なくないはずである」（P. 14）という。つまり、「彼ら・彼女ら」の物語としてではなく、著者と読者も含めた〈われわれ〉の物語として、トルコの震災を〈われわれ〉の日常世界へと連なる広がりをもって描くこと。その営為を通じて、「世界の様々な場所で、災害とともに生きる人びと同士を、さらにそうした人びと、今後現われてくるであろう災害に関する人類学的な研究や実践をつなぐ助けとなること」（p. 14）。それが本書の目指すところである。

* 宮城学院女子大学国際文化学科

震災を研究テーマとしてきた著者は、「いますでに起きつつある災害に対して、物理的に状況を改善することに貢献」(p. 13)する術をもたない〈傍観者〉として調査対象に関することの倫理的意味を、徹底的に問わざるを得なかったはずだ。自身が〈傍観者〉にすぎないという事実から逃げださずに留まることを選んだ著者による苦闘の成果である本書は、応用的なスタイル—問題点をあぶり出すこと、批判すること、改善への具体的な提言をすること—から距離を置きつつ人類学の内と外をつなごうとする、意欲的かつ挑戦的な試みともなっている。

〈傍観者〉でありながらも無為への撤退を拒む著者が、自らの立場を位置付けるための概念的なよりどころが、「公共性」である。序章では、ハンナ・アレントの議論に依拠しながら、公共性の概念が整理される。著者のまとめによれば、アレントの「議論における公共的な領域とは、相異なる多数の人びとによって構成される領域」(p. 12)という幅広い意味において捉えられるものであり、ハーバーマスが着目するような政治的文脈、すなわち公の場での議論を通じた合意形成であるとか、公権力に対する市民の抵抗といった側面は、成立の必要条件とはされない。アレント的な意味での公共性を特徴付けるのは、「開かれ」「多数性」「持続性」という3つの要素(p. 32)であり、それらが成り立つところに必然的に生じてくる、人びとのつながり、複雑な諸実践、新たな意味の生成、といったことが、著者が捉えていきたい現象であるとされる。

というといささか漠然としているようだが、著者は「はじめに」において、①災害における公共性、②トルコにおける公共性、③人類学における公共性、という3つの切り口を提示することによって、公共性をめぐる本書の議論に輪郭を与えている。本論部分は、3部構成(各部はそれぞれ2つの章を含む)となっている。各部のテーマは、第I部が「人びとの間を流れ、人びとを結びつけたら、引き離したりするものとしての記憶や情報」(p. 254)、第II部が「時間性」(p. 256)、第III部が「より積極的に、地震とともに生きる生のあり方」(p. 257)、である。各部においては、いわば縦糸である各々のテーマに、3本の横糸、すなわち公共性をめぐる3つの切り口が織り込まれる形で、議論が展開されていく。

第I部の第1章では、1999年の震災の記憶がいかんして共有されていくのか、が論じられる。そこで着目されるのは、多数の犠牲者を出したコジャエリに建てられた記念碑である。それが発している、忘れないでいよう、という強烈的なメッセージには、奇妙なことに「誰が・何を」忘れないのかについての情報が、欠落している。その欠落を、著者は肯定的に捉える。「誰か・何か」は、明示されないがゆえに、協働的に創り出される(ことができる)ものとなり、固定された記憶が不可避免的に被る限定や風化を免れる可能性を、拓くのだという。

第2章では、地震観測所を舞台として、地震に関する「科学的」知識が生産される様が描かれる。たとえばマグニチュードの数値

などの形で明瞭・簡潔に切り揃えられた科学的知識や情報は、観測・分析者たちと観測機械などの諸装置とが複雑に関り合うなかで創り出された結果であるのみならず、そうした関り（およびその連なりとしてのネットワーク）そのものを生み出す母胎でもある。また、それらの知識は、人びとの日常的なコミュニケーションを通して一般に流通していくが、その過程で、ときにノイズをまとい、創造的な解釈の余地を残す。それが結果として、立場を異にするアクター間における議論や理解の集いといった、つながりの実践を呼び起こしていく。

第Ⅱ部第3章では、トルコにおける地震学と防災政策の、100年を超える歴史が概観される。また第4章では、著者が観察した、イスタンブールの特定地区における、耐震再開発プロジェクトの顛末が描写される。第Ⅱ部では、マクロとミクロの時間の流れが対比されながら、地震をめぐる現在から過去と未来を見通すうえで、避けようのない不確かさが強調される。何が起こった／起こるのか、だから何をすればよいのか、という国家や社会のレベルで総論的に共有される問いは、その答えを見いだす局面では、関る者の立場や視点に応じて無数の異なる各論を生み出す。そして事態は不安定となり、膠着したり不首尾に終わったりといった歓迎されない帰結に至ることもあるが、一方では、その不安定さゆえに変化に開かれ、アクター間の新たな関りを生み出す可能性を残す。

第Ⅲ部第5章では、ボランティア活動が論じられる。阪神淡路大震災時の日本と同様

に、トルコにおいても1999年の震災に端を発して、被災者／地援助や防災のボランティア活動が興隆した。それは被災者の（ときに声にならない）呼びかけへの応答として生じた動きであり、また自らが呼びかけの主体となって、親族・友人・同僚といった従来の関係の枠組みにとどまらない、「個々人のプライベートな関心を越えて社会的な問題に取り組もうとする際の、人びとの関わり方の様式」(p. 257)を、新たに構築していく動きでもあるという。第5章では、震災がもたらしたそのような創造的な効果が、しかしながら持続という点において深刻な弱さを抱えていることも併せて指摘され、その構造的な問題点が考察される。

第6章は、前章を引き継ぐ形で、震災が生み出した新たな関りの持続可能性が、論じられる。被災の衝撃によって燃え上がった熱狂も、喉元過ぎれば忘れられる。しかしそれでもボランティア活動／組織を継続していくための「試行錯誤」として、イスタンブールの防災ボランティアの活動が分析される。著者が事例から見いだした、メンバーによる関心の複数化や、新たなアクターの巻き込みといったさまざまな工夫は、持続性を保証する特効薬とはいえないまでも、日本における同様の問題を考えるうえで、参考になる（私事になるが、書評者も2011年以来、学生による災害復興ボランティア活動を展開してきたなかで継続性の問題に直面しており、本章の記述に教えられることが多い）。

結論部では、第1章から第6章までの議論を振り返ったうえで、トルコと日本を貫通

させる形で、震災における「公共性」の有り様が、考察される。そこで手がかりとされるのが、「絆」や「緩やかなつながり」という、東日本大震災後の日本において広く流通したキーワードである。強固な同質性を要求する「絆」と、各自の異なる志向関心へと分解しかねない「緩やかなつながり」。その二極の間にあるものこそが、「本書で「公共性」という名で追い求めてきた関係性」(p. 261)なのだと、著者はいう。そして、『震災の公共人類学』は、こうした関係性を描き出すと同時に、関係性の一部を目指すものである」(p. 262)と述べる。

本書の特徴は、その極めて抑制的な筆致である。著者は、事例の描写と説明に徹して、いたづらに論を踊らせない。結果として、トルコの震災をめぐる入り組んだ関係性としての「公共性」を多面的に描き出すことには成功しているが、そこからさらに一步踏み出して公共性という概念をめぐる問題系を開拓していこうという力強さには、欠けるかもしれない(たとえば、「はじめに」で公共性に関する3つの関心を提示しながら、結論部ではそれに呼応した論の展開と整理がみられない)。ただしそれは、各章を「一つのテーマをめぐるストーリーとして読めるように心がけた」(p. 12)という記述からも分かるように、著者が意図的に選択した態度である。その選択は、トルコにおける〈地震と地震の間〉を描こうとしている最中に、期せずして東日本大震災に直面したことと、無縁ではあるまい。敢えて慎重に抑制的に書かれた本書は、著者による「震災の公共人類学」の総括

ではなく、その序章に当たるものだと、捉えるべきであろう。深甚なる可能性を秘めた著者の取り組みの、今後の展開に期待したい。

田村慶子. 『多民族国家シンガポールの政治と言語—「消滅」した南洋大学の25年』明石書店, 2013年, 208 p.

鍋倉 聡*

本書は、シンガポールにかつて存在した南洋大学(南大)について、その歴史を中心に行なった研究の成果をまとめたものである。南大は、1956年に当地の華語教育の最高学府として開学した大学で、1980年に「消滅」し、その敷地は現在、南洋理工大学という別の大学になっている。

シンガポールは、リー・クアンユー初代首相率いる人民行動党(PAP)の下で一元管理社会が築かれて久しく、その歴史については、リーが自身の著作や演説等で繰り返すような史観が支配的である。本書は、南大について、「先行研究」、「当時の華字新聞と英字新聞、南大同窓会の記念誌や回顧録」、「公文書や関係者のインタビュー資料」といった史資料をもとに研究を進め、こうした史観を再検討する試みだといえる。

本書の内容を以下に記すと、まずその目的は、「はじめに」で示されているとおり、南大の歴史を「政治と言語の葛藤という視点から振り返ること」である。これまで十分に研究が行なわれてこなかった南大について、さ

* 滋賀大学経済学部

さまざまな史資料をもとに研究を行ない、「華語派華人が英語派との抗争の末に社会の周縁に追いやられていく過程であり、権力の側から見れば、多民族多言語の社会において民族の言語や文化をどのように政治的に管理するのかという政治と言語の葛藤の歴史と捉えて分析」することが試みられている。南大の事例はまた、シンガポールだけでなく、「多民族多言語社会においてどの言語を公用語や国語とし、多様な文化をどのように管理するのかという」「多くの国家が抱える課題」を解決するにあたって、重要な事例を示すものとして研究が進められている。

第一章では、南大が開学する1956年3月までが取り上げられ、植民地時代のシンガポールの華人と華語学校（華校）をめぐる状況の下に、南大の開学が位置付けられる。華校は、小学校ですら政府の支援を十分に受けられず、政府から距離をとり、華人有力者の支援によって運営された。こうした特徴は、南大に通じるものである。華人は一枚岩でなく、英語学校（英校）で教育を受けた英語派と華校で教育を受けた華語派に分かれていた。戦後、中華人民共和国の成立等により華校をめぐる状況がさらに悪化する中、1953年1月に、華人有力者のタン・ラクサイ（以下の人名表記は全て本書に従う）によって、華語大学設立構想が発表された。大学設立に向けて、人力車夫たちが寄付を集めて走り回るなど華人社会の熱気が高まる中、南大は華校以来の政府との距離もあり、その最初から「権力に祝福されない大学」であり、開学式典の日が「もっとも輝く日」であった。

第二章では、開学後の南大の困難が記される。困難は、財政難と学位承認の問題のほか、一番大きかったのは、1959年の政権交代でPAP政府が成立する前と後の二つの異なった委員会による、報告書の内容とその公表であった。他方、こうした困難な中、設備も不十分な環境で、学生たちが自分たちで助け合い熱心に学び合う様子が記されている。

第三章では、シンガポールが1963年にマレーシア連邦の一州に加わる形で独立し、1965年に分離してシンガポール共和国成立に至る中、南大とPAP政府の対立が激化し、ついにはタン・ラクサイ南大理事長の市民権が剥奪されるなど南大がさらに追いつめられていく様が描かれる。南大にとって致命的だったのは、華僑華人研究で著名なワン・グンウーが委員長を務めた委員会の報告書であった。本章では、報告書に対する学生たちの激しい反発の様子が描かれている。

第四章では、1980年に南大が消滅に至るまでの過程が記される。それは、シンガポール大学と合併しシンガポール国立大学が設立するという形で行なわれた。南大最後の卒業式が挙行された直後に、キャンパスの取り壊しが始められたことが、その消滅を象徴する具体的な描写として描かれている。

第五章では、南大が消滅に向かう一方、シンガポールでは1979年以降、華語普及運動が行なわれ、華語が一転してPAP政府によって促進されるようになった変化が記される。1990年代以降は、南大の復権に向けた動きが、シンガポール国外の卒業生によって活発になった。かつての助け合いは、南大消滅後

も世界各地に息づいていたのである。こうした中、PAP 政府は、南洋理工大学を南洋大学に改称する「復名」を認めない一方、「アジアの価値」を受け継ぐべく「南大精神」については、その重要性を強調するようになって現在に至っている。

本書の意義をここでまずひとつ挙げると、関係するさまざまな史資料を用いて南大について検討し直し、リー初代首相を頂点とするシンガポールで支配的な史観の下にある南大の位置付けから距離をとり、こうした史観を再検討することを試みたことである。

シンガポールでは、評者の理解によると、華人中心主義やマレー人中心主義、そして共産主義に打ち勝ったことが、その繁栄を築く礎となったといった史観が支配的である。華人中心主義やマレー人中心主義は、ショービニズムやコミュニズムとされ、コミュニズムの共産主義やさらにはコロニアリズムの植民地主義とともに、諸々の「C…ism」に打ち勝ったという、明快で分かりやすい図式が導き出される。こうしたシンプルな図式は、シンガポールの人々に半ば無意識のうちに刷り込まれており、シンガポール研究者の多くも例外でない。そこで南大は、華人中心主義や共産主義を育んだ、問題の多い大学と位置付けられやすい。

これに対して本書は、さまざまな史資料を用いて研究を進めることで、こうした図式に対する反証を試みている。本書のように具体的に興味深い事例について、丁寧で細かい描写を積み重ねていくことは、支配的な図式から脱却していくにあたって有効であろう。

他方、細かいことかもしれないが、シンガポール研究において細かいことが重要であることを鑑み、その用語法について二つの点を指摘しておきたい。一点目は「メルティング・ポット」である。本書では、「華人、マレー人、インド人などそれぞれの民族がそれぞれのアイデンティティを保持しつつ、国家と社会の発展に寄与する」ことを『メルティング・ポット』的な国民統合」としている。しかし、メルティング・ポットは本来、文字どおり、複数の金属を溶け合わせて合金をつくる「るつぼ」を意味し、シンガポールに当てはめると、華人、マレー人、インド人等を融合してシンガポール人をつくり上げることになる。本書のような意味で用いるのであれば、相応の説明が必要だったかもしれない。

二点目は、英語の「race」と、それを訳した華語の「種族(种族)」の引用についてである。本書では、原文を直接引用するにあたって、「民族」と訳されることが多いのだが、「race」はあくまで「人種」である。シンガポールでは、国民(nation)の間の差異を表わす用語として「race」が広く用いられる中、その是非はともかく当人の発言や原文を直接引用するにあたっては、民族がnationも意味することを鑑みれば、原文が分かるようにするといった何らかの処置が必要であろう。

本書の意義は、こうした些末な点よりもむしろ、これからさらにシンガポールをもとに研究を進めていくにあたって、興味深い点を多く示していることにある。

一つ目は、華語をなくすのか強化するのか、両者のせめぎ合いである。華語をなくそうとするだけだったら、国家権力による言語抑圧の一事例に過ぎない。それがシンガポールでは、1970年代後半以降、政府が華語を促進しているのである。華語に代表される華人性の強化と弱化的同時進行は、国家との関係でエスニシティ研究を進めていくにあたって非常に興味深い。

二つ目は、多言語社会における華語の位置付けである。本書では専ら英語との対比で華語を捉えているが、多言語社会であるシンガポールでは、華語と英語のほか、マレー語、福建語や広東語といった華語諸語（いわゆる華語方言）、タミル語をはじめとするインド諸語といったさまざまな言語が用いられている。こうした中に、華語を位置付けるとどうなるのであろうか。華語は、支配的な言語である英語に対して自分たちの弱い立場を主張する言語となる一方、華語諸語に対しては、自分たちの言語を抑圧する、支配的・抑圧的な言語となり得る。また国語であるマレー語とはどのような関係だったのであろうか。華語は、英語以外の言語との関係も重要であり、華人以外の人々の主張も重要である。英語と二項対立的に対比するだけでなく、他の言語との関係を複合的に位置付けるといった研究が、華語の微妙な立ち位置を明らかにするにあたって、今後求められるであろう。

三つ目は、南大を最終的に消滅させたリー初代首相の言動である。その時々状況によって実によく変化していることが、本書から改めてよく分かる。若手弁護士だった反植

民地時代には華校学生を弁護し、1959年に権力を握るやマレーシア連邦成立に向けてマレー語を促進し、1965年に分離独立するや英語を重視し始める。それがまた1970年代後半以降は、一転して華語重視も唱えるのである。このような不貫性が、実は政治支配を続けるのには有効なのではないかとすら思わせる。こうした中、研究者にとって重要なのは、その中に貫性を見つけ出してその支配を正当化するのではなく、本書のように、その変容を記録し記述していくことであろう。

日本でもこれから一層、政治権力側の主導で大学再編が進められるかもしれない中、南大の事例は示唆に富む。外部報告書の評価を駆使しそれを積み重ねていくことで廃校に追いこまれた南大の事例が、政治権力側の大学再編のマニュアルのようなものにならないことを願いたい。

本書は、シンガポールにとどまらない重要な課題を示しており、こうした課題に応じていくにあたっては、シンガポールの現代史、とくに本書のように1950年代以降の出来事について細かく取り上げ、精緻な研究を積み重ねていくことが重要である。こうした研究を今後進めていくうえで、本書は重要な意義をもつ一冊であるといえよう。

山本佳奈.『残された小さな森—タンザニア 季節湿地をめぐる住民の対立』昭和堂, 2013年, 232 p.

生方史数*

本書を読んで、海外をはじめ自分で調査した時のことを思い出した。タイの調査地からバスで移動中、川岸に広大な「未利用地」が横たわっていることに気づいた私は、人々がこの土地を開拓しないのはなぜだろうと疑問に思っていた。のちに私は、そこは季節湿地で開発が困難な場所であったこと、そして、そのような場所も大なり小なり住民と関わりがあり、安易に「未利用地」などと呼べる場所ではないことを知った。

本書の舞台であるタンザニア・ボジ高原の季節湿地も、おそらく外部の人間からみれば、単なる「未利用地」として見過ごされてしまうだろう。なかには、開発すべき土地だと一方的に断じる人もいるかもしれない。しかし、本書を読めば、そのような外部者の認識がいかに浅薄で、ときに傲慢なものであるかが理解できる。人々の生活世界は、外部者の想像以上に精緻なものなのである。

とはいえ、生活世界も状況に応じて変容する。土地不足やグローバル化などの影響を受け、季節湿地の耕地化が進みつつあるという。本書は、そのような湿地の耕地化が進行するプロセスを、ニイハを中心とした住民の主体的な対応や交渉のなかで捉え、「新たな生態・社会環境の中で地域の共有資源が再定

義されていったプロセス（まえがき）」として描き出そうとする試みである。

本書は、9つの章から構成されている。序章では、本書の課題と方法が、アフリカ研究やコモンズ論と関連づけてまとめてある。第1章では、本書のテーマが濃縮された出来事として、イテプーラ村の季節湿地にある小さな「孤独の森」の話が紹介される。その開発をめぐっていかに住民が対立し、どのように折合いがつけられたかが、ニイハ社会の文化的背景とともに記述される。第2章から第6章にかけては、第1章でみた出来事が生じる背景が、人と自然との関わり（第2章）、農業の変遷（第3章）、季節湿地の環境と利用（第4章）、コーヒー園の拡大（第5章）、ウシの飼育（第6章）というように、生活と自然に関連するさまざまな側面から分析される。

そして、第7章で改めて本題に戻る。「行き過ぎた耕地化」の反動として、一旦耕地化された湿地が放牧地に戻されたシウイングガ村の事例が述べられる。そこで、タンザニアの土地法とニイハ社会の土地所有制度の変遷をみながら、湿地の開発と保全をめぐる住民の対立と話し合いの経緯を分析することで、ローカル・コモンズの管理における住民の役割について考察し、終章における総合的な考察につなげている。

本書の主な論点は、終章にまとめられている。ここでは、湿地で耕地が拡大した経緯と背景、共有資源をめぐる対立と和解のプロセス、アフリカ農村におけるローカル・コモンズの3点について概略を述べておきたい。

* 岡山大学大学院環境生命科学研究科

かつて、ニイハはアップランドのミオンボ林を利用した焼畑農耕を主な生業としていた。20世紀以降は人口増加やコーヒー栽培の普及により、焼畑から常畑への移行が進み、林はトウモロコシ畑やコーヒー園に置き換わった。この過程で、住民の食糧生産には農業資材が必要になり、コーヒーが換金作物として不可欠な存在となった。一方で、季節湿地は、一部が草地休閑焼畑（イホンベ）と灌漑畑（ピリンピカ）の場として供されるほかは、ウシの放牧地として利用される共有資源であった。ウシは、ニイハ社会では一種の威信財であり、婚資への利用など重要な価値を有していた。

しかし、1980年代以降、コーヒー栽培のさらなる拡大や農地の分割相続などによって、アップランドの食糧生産用農地が不足するようになった。このような耕地不足に直面した住民が、1990年代以降灌漑畑の水路掘削や畝立て技術を応用し、湿地でトウモロコシ畑を栽培するようになっていった。

この湿地トウモロコシ畑の拡大は、共有資源であった季節湿地の全面的な囲い込みを意味する。よって、湿地開発はウシの放牧地利用との競合を生む可能性があり、現にある程度の対立が生じた。しかし、湿地開発が行なわれた時には、ウシの飼養は実際には耕地需要とそれほど競合する存在ではなくなっていた。牛耕が普及し、牛の価値が「富の象徴」から役畜としての「労働力」へと変容するとともに、繁殖を外部地域に依存するウシの更新システムが発達したことで、ウシの所有が分散し、限られた土地でも放牧が可能になっ

たのである。

以上が、湿地が耕地化した背景と経緯に関する著者の分析である。一見変容の条件が整っているかにみえるが、現実には「共有資源には多様な価値が存在し、住民と資源との関わりも一樣でないため、利用形態が変動する過程では様々な軋轢が生じる（p. 203）」。著者によれば、そこには共有資源をめぐる以下のような対立と和解のプロセスがあった。

共有資源である季節湿地には、人々の間で「ウシのための土地」という共通認識が存在していたものの、利用に関する明確な合意は存在しなかった。そのような状況下で、イテプーラ村で湿地開発の推進者が祖霊信仰の対象であった森を伐採するという事件は、「放牧地」「神聖な森」などの従来の湿地の価値と「耕地」という新たな価値の衝突を招いた。しかし、この対立は、湿地トウモロコシ畑の有益性が広く認められるにつれて徐々に沈静化した。「経済状況に後押しされた住民の先駆的な行動（p. 204）」が慣習を打破する契機となったのである。村では、小さな森を含む一部の放牧地は残されることになったが、それ以外の湿地は開発された。

一方で、シウインガ村では、村の行政官が、既に断片化されていた放牧地を住民に分譲したことから、土地を購入した世帯とウシを放牧している世帯との間で対立が起こった。村評議会での調停は不調に終わり、住民の働きかけに応じて県行政が介入した。その結果、係争地が元の放牧地に戻されることになり、事態は収拾に向かったのである。著者はこの事例を、「公」「共」「私」が地域資源

のどの部分にどう関るのかについて明確な指針がないなかで、「住民の内発的な動きを基盤としながら、地域資源の管理・運用に行政が関与していく (p. 205)」環境ガバナンスのひとつのあり方として評価している。事例を踏まえ、著者は、土地や資源が稀少化した現代アフリカ農村におけるコモンズ管理のあり方について議論している。

まず、シウィング村で共有地が確保された背景として、著者はウシの役畜としての公益性に着目する。ウシは個人の資産だが、所有者以外の人々もウシの畜力に依存しているため、住民は間接的に放牧地の恩恵を受けている。このような公益性の存在が、コモンズを維持する重要な要因となるという。また、和解と対立のプロセスを経て、湿地は「放牧地」として再評価され、もはや「余った土地」ではなくなった。つまり、残された湿地は地域住民の認識が深まった新しいコモンズとして質的に変化したという。換言すれば、そのような変質を導き出した住民による再定義プロセスそのものが重要であり、このプロセスがコモンズ維持の方向に働くために重要な要因のひとつが、公益性だということなのだろう。

以上が本書の概要である。特筆すべきは、フィールドワークを通じて地域で起こっている出来事をトータルに理解しようとする姿勢である。著者の行なった調査は、水環境や植生などの自然科学的なものから、家計調査や資源をめぐる交渉の追跡といった人文社会科学的なものまで多岐にわたる。このような地域研究者としてのホリスティックな姿勢

は、結果的にコモンズの利用と管理を立体的にみる姿勢につながっている。

これまでのコモンズ研究は、水や森林など、特定の資源における管理制度に着目してなされることが多かった。しかし、本書は季節湿地のみに着目するのではなく、それを取り巻くさまざまな土地利用を射程に入れ、住民の生活体系のなかで季節湿地の変容を捉えようとしている。その結果、コモンズの変容を、単にコミュニティを一括りにした記述やボズラップ流の稀少化への対応としてではなく、それらの分析がこれまでブラックボックスにしてきた、生活の諸側面にまたがった個人や社会の調整過程として描き出すことに成功している。

一方で、各章で展開される多様なディシプリンが、本書のなかで必ずしも十分には統合されていないように思われる。たとえば、第2章や第4章で分析される自然科学的な知見は、それぞれ興味深いものの、全体の論旨にはあまり関ってこない。これらの情報が、地域を「厚く記述する」ことに貢献していることは確かだが、かえって論点をぼやけたものにしてしまっている感も否めない。

その最たる点が、調査地およびアフリカのコモンズの何が問題なのか、コモンズをどうすべきなのかといったメッセージがあまりみえてこないことである。コモンズ論は、元来資源管理を念頭に置いた規範的・政策的な議論である。したがって、共有資源の変容をコモンズ論の文脈で実証的に論じる場合、同時にその規範的な立場もある程度表明しておかなければならないのではないだろうか。本書

の場合あえていえば、コモンズの管理という政策の方向に基本的に共感しつつ、コモンズをめぐる住民の交渉を、「有限・有益な資源を平和裏に、そして持続的に利用しようとする地域住民の潜在的な能力 (p. 8)」として生かすには何が必要かということになるのかもしれない。しかし、本書の分析は、そのような疑問に必ずしも十分に答えているとはいえない。たとえば、シウィング村の事例で、県行政が介入の際にとった姿勢は、事態の行方を決定的に左右する要因であったはずである。県の判断は、本書で述べるように住民の「交渉術 (p. 197)」の成果としてなされる場合もあるが、行政の方針を貫徹するためになされる場合もある。何が両者を分けるのであろうか。

アジアや日本の事例から考えると、現在のコモンズ管理の主な論点は、住民参加によって「政府の失敗」をいかに防ぐかという従来の議論から、住民同士では解決の難しい「コミュニティの失敗」に対してどのような「協治」の道筋がありうるかという方向に移りつつあるように思える。つまり、いかにコモンズ論を超えるかが重要になっているのである。本書がコモンズ論の文脈でより意義のある主張を展開できるとすれば、ひとつにはそのような方向があるかもしれない。また、住民によって再定義された「新しいコモンズ」が、資源管理上、あるいは人々の生活の持続的発展にとってどのようなレジームであり、どうあるべきなのかという問いも重要である。本書の自然科学的な分析がそのような方面で生きてくれば、文理の融合した立体的な

コモンズ論を構築できるかもしれない。

地域の実態をモノグラフとして描く際に、その内容からある論の文脈で何がいえるのか、頭を悩ませることがよくある。地域の詳細な記述と鋭い議論との間には、どうしても隔たりが生じてしまいがちである。両者をつなげるのは容易なことではないが、地域研究の新たな地平を開くためには必要なことではないだろうか。

遠藤聡子. 『パーニュの文化誌—現代西
アフリカ女性のファッションが語る独自
性』昭和堂, 2013年, 240 p.

金谷美和*

本著のタイトルにある「パーニュ」とは、「工場生産の更紗」のことである。パーニュは、幅約1メートル、長さ5.4メートルで販売され、3等分した大きさが巻き布になるという。西アフリカの女性は、パーニュを巻き布として身にまったり、パーニュで仕立てた衣服を着用している。著者の研究の発端は、初めて西アフリカを訪れた際、女性たちが着用していた色鮮やかで装飾の凝らされた衣服に驚いたことにある。

著者は、「西アフリカの女性たちの衣服が、なぜこのように独特なのか」という問いをたてた。著者の考える現代の衣服文化の傾向は、「世界中の服装が洋服に統一されたかに見えるほど顕著な近代化、西欧化」であり、「西欧化がすすむ現代の衣服文化において、

* 国立民族学博物館

人びとが身につけているのは世界的に広まる洋服か、いまだ駆逐されずに残っている民族服」のどちらかである。そのような現代の衣服の現状に、西アフリカの女性たちの衣服はあてはまらなかった。つまり、西アフリカ女性のあいだで着用されている衣服は、洋服でもなく、また民族服でもない独自の衣服であることに著者は気づき、なぜこのような衣服が着用されているのかについて明らかにしようとしたのである。著者は、フィールドをブルキナファソの一地方都市ボボジュラソとその周辺村において調査を行ないながら、西アフリカ全域を対象に女性の衣服文化について論じている。

評者はアフリカ研究者ではない。アフリカの染織品や衣服文化に対する学術的関心は、評者の研究対象であるインド西部との関連からもたらされている。インド西部から、アフリカ東部に染織品が輸出され、衣服文化に影響を与えてきたことから双方のモノ、人の交流に関心をもってきた。また、インド更紗やジャワ更紗の技術やデザインが、機械捺染による「プリント更紗」（パーニュもそのひとつである）として世界展開してきた歴史研究も行ない、著者も引用している国立民族学博物館特別展覧会『更紗今昔物語』に携わった。したがって、比較研究の観点から本著の評を行ないたいと考える。

まず、本著について紹介し、さらにいくつかの論点に絞って、論じたい。

パーニュを用いた衣服が支持される理由を、著者は次のようにまとめている。布は、西アフリカで富として重要視されていたた

め、パーニュは、布として流通する点で在来の服飾文化と親和性があり、広く受け入れられている。また、安価に入手しやすいにもかかわらず晴れ着にも使えること、加工しやすいこと、他の布にはない仕立てデザインと多様さという新しい要素を加えた服地であること、デザインのバリエーションに流行があつて短期的に更新されること、多様な形を実現できる柔軟さと絶え間なく移り変わる一時性を備えている点が、洋服に対して競争力もち普及しているという。

さらに、世界的な衣服文化の西欧化、あるいは文化のグローバル化傾向がみられるなかで、西アフリカでは個別のローカルな場にある衣服文化が抹殺されるのではなく、むしろパーニュを用いた衣服という一地域の衣服文化が独自性を保っていることの重要性を著者は指摘している。そして、このような独自の衣服文化が生じたふたつの背景について述べている。

ひとつは、西欧的近代文化との接触以前に、すでに自分たちの側にもそれに対抗しようするような超民族レベルの文化的伝統ができていたために、異なる文化を無抵抗に受け入れるのではなく、自文化を保ちながらそこに組み入れることができたということである。パーニュやその起源である更紗、イスラームや西欧の文化を取り入れた衣服の様式は、布を加工した衣服が一般に広まっていなかった西アフリカにおいて広く受け入れられ、またこれらが受け入れられたのちの植民地支配期における西欧文化との接触においては、これらの服地や衣服様式があつたため

に、西欧の衣服に取って代わられることがなかったというのである。

ふたつめは、パーニュを用いた衣服が時代の要請に応じて変化する特質をもつこと、そしてそのような衣服を維持できる環境や仕組みがあることだと述べる。パーニュという服地が入手しやすく、また衣服生産を支える小規模な仕立業が個別に衣服製作を行なうというシステムが確立していること、流行を生み出す「モデル写真」の西アフリカ都市間の流通システムが確立していること、などが該当する。

つまり、「アイデンティティの拠り所となる文化があり、民族のレベルを超えて共有されていること、その文化的要素が時代の要請に応じて変化する特質をもつこと、地域にそのような衣服を維持できる環境や仕組みがあること、これらの点が、ある地域の文化が、西欧文化、グローバル化する世界においてなお独自性を保つ背景として指摘できるのではないか」と著者は結論づけている。

では次に、いくつかの論点に絞って論じたい。

まず、著者が冒頭にたてた「なぜ西アフリカ女性は、洋服でもなく、民族服でもない独自の衣服を着用しているのか」という問いに本書は十分に答えているのか検討したい。

西欧的近代文化との接触の以前に、すでに対抗しうるような超民族レベルの衣服文化ができあがっていたために、洋服を無抵抗に受け入れるのではなく、自文化を保ちながらそこに組み入れ、パーニュで仕立てた衣服という独自の衣服文化を構築することができたと

いう著者の考察には説得力があると評者は考える。

ただ、ここで気になるのが、著者が本書の題目にも用いている「独自性」という言葉である。パーニュにより仕立てられた衣服が、何と対比したときに「独自性」があるといえるのかが曖昧なまま、この言葉が用いられていて、しばしば評者は読み進めるときに困難を感じた。近年の装いに関する研究は、布を素材とする衣服だけが対象なのではない。Dress（身体にまとうもの）の定義は、*assemblage of body modifications and/or supplements*（身体に変形や・あるいは補足をするものの組み合わせ）[Eicher and Roach-Higgins 1992] であり、dressには、布で作った衣服、帽子、はきものだけでなく、髪型、装飾品、化粧品、香水、身体加工（入墨、ボディ・ピアス、整形）なども含まれる。この定義に従うと、裸体に装飾品をつけるという西アフリカの諸民族が行っていた慣習は、dress culture に含まれる。つまり、西アフリカの各民族の従来の身体に何かをまとうという文化はすでに消滅していて、「独自性」はすでに失われてしまっている、と理解することもできるのである。

あるいは、パーニュで仕立てた衣服の「独自性」が、民族服でもなく洋服でもない衣服のありようを指して述べているのであれば、そのような事例は他にもみることができる。

ジャワ更紗のデザインを取り込んだプリント更紗は、インドネシアの各島、ベトナムを除く東南アジア大陸部やネパールにおいて、従来それらの地域で着用されてきた女性の腰

布や筒型スカートに置き換わるかたちで着用されるようになってきている [吉本 2006: 54].

このような現象は、洋服に代替されず、従来それらの地域や民族のあいだで着用されてきた腰布や筒型スカートという衣服の形態が維持されているという点では、衣服文化の「独自性」が維持されているとみえるかもしれない。しかし視点を変えれば、在来の織りや染めの技術によって製造されてきた腰布や筒型スカートが消失し、地域や民族の違いを無化するような均質化された衣服文化に覆われてしまったともいえる。

評者の調査地であるインドにおいても、同様の現象が生じている。インドでは、既婚女性の多くがサリーを着用する。大都市以外では女性の洋服姿は少なく、一見してインドでは衣服文化の独自性が維持されているようにみえる。しかし、実際にはインド西部のように従来サリーを着用してこなかった地域があり、サリー着用地域であっても、各地域や民族集団ごとに染織技法が異なるサリーが存在し、サイズや身体へのまとい方が異なっていた。それが現在では、規格化されたサイズの生地プリントによって色柄をつけたサリーが圧倒的に多く、サリーを着用していなかった地域や民族を含めてインド全域で着用されるようになってきている。洋服に駆逐されていないという点で、インドの独自性を保っているといえるが、地域性、民族性に関しては、多様性は失われ、均一化された衣服文化に覆われるようになってきているともいえるのだ。

東南アジアや南アジアの衣服の状況と比較するとき、プリント更紗という衣服の素材の

重要性が浮かび上がってくる。つまり、プリント更紗とは、近代以降のグローバルなモノや情報の流通が発達した時代に、世界各地において地域や民族の基層の衣服文化に入り込むかたちで新たな衣服文化を創出した素材だといえるのである。そして、パーニュやパーニュで仕立てられた衣服は、そのようなプリント更紗が素材となって作られた衣服文化のひとつとして位置づけられると評者は考えている。西アフリカ女性の着用するパーニュを、グローバルに生じている衣服文化の創出のひとつとして位置づけるとき、パーニュの衣服文化の誕生について詳述した本著は、今後も参照されるべき研究であると評者は考える。

次に、パーニュで仕立てた衣服という独自の衣服文化が存在するには、地域にそのような衣服を維持できる環境や仕組み、つまり小規模な仕立屋が個々の衣服を製造するシステムや他の都市の流行を共有し取り入れる「モデル写真」というシステムがあることだという著者の考察について検討したい。

仕立屋による製造や「モデル写真」のシステムが確立し、機能しているのは、それを顧客である女性たちが求めているからでもある。パーニュで仕立てられた衣服を支えるシステムは、パーニュで仕立てられた衣服を求める女性たちと、産業との双方向的な働きかけによって成立しているといえるだろう。このとき女性側からの働きかけを軽視すべきではない。たとえば、パーニュの選択は女性自身によってなされているとあるが、女性たちが、生地を選ぶときに何を基準にしているの

かについて本著では言及がなかった。パーニュの色柄には流行がある。パーニュの製造会社は、定期的にパーニュの新しいデザインを発表している。過去に販売されたデザインは保管され、時代を経て繰り返し活用され、それをもとにデザイナーにより新しいデザインが開発されている。消費者である女性の生地を選択が、流行をどのように動かし、それが製造会社のデザイン開発にどのようにフィードバックされているのかが明らかになれば、大変興味深い。

評者は著者に、なぜパーニュで仕立てた衣服が女性たちの心をつかんだのか、という点について追求して欲しかった。著者は、洋服でない衣服文化がこの地域に根づいた背景を明らかにしているが、それがなぜパーニュだったのかということは依然として不明だからである。色鮮やかでデザインが多様、流行に沿っていることは、衣服として十分魅力的であることは想像できるが、ただ単にそれだけだったのだろうか？

パーニュで仕立てられた衣服は、まさに現代を生きる西アフリカの女性の「生」にフィットする衣服であったはずだ。衣服は肌にまとうものであり、まとうことで身体と身体の外にひろがる環境とのあいだに境界線をつくる。衣服は私とは誰か、どのような人間なのかということを表現する媒体である。女性たちにとって、身体観やアイデンティティ、ジェンダー、美的価値などを満たすような衣服だったはずである。著者が論じているような、政治的経済的な状況だけが、女性たちにパーニュを選び取らせているとは思えない。

著者が述べる「女性自身の堂々とした姿やしなれに対する意識の高さ」は、それだけでは説明がつかないからである。

以上論点を定めて、評論をすすめてきた。本著で書かれていないことについて「読みたかった」と述べるのはないものねだりであることは重々承知のうえである。今後著者が研究を重ねられたら、ぜひその成果を読みたい評者のラブコールだと理解して頂けたら幸いである。

引用文献

- Eicher, J.B. and M.E. Roach-Higgins 1992. Definition and Classification of Dress: Implications for Analysis of Gender Roles. In Ruth Barnes and Joanne B. Eicher eds., *Dress and Gender: Making and Meaning in Cultural Context*. Oxford: BERG, pp. 8-28.
- 吉本 忍. 2006. 「アジアのプリント更紗」『更紗今昔物語』国立民族学博物館, 54-57.

東長 靖. 『イスラームとスーフィズム—神秘主義・聖者信仰・道徳』名古屋大学出版会, 2013年, 314 p.

赤堀雅幸*

日本のスーフィズム研究を牽引し、世界的にもこの分野の専門家として知られる著者の手になる本書は、二重の意味で地図としての役割を果たす。

その第1の意味は、過去四半世紀余りに生み出された著者の論攷の相互の位置づけを

* 上智大学外国語学部

示す地図として読み解くことができるということである。本書は1986年から2010年にかけての著者の論攷のいくつかを集成して、一巻の著作となした作品であり、著者の研究の展開を追う見取図を提供してくれる。評者が初めて著者と面識をもったのは、たがいが学部2年生だった1981年のことと記憶しているが、その後、エジプト留学の時期が1年ほど重なり、また1997年から共同研究を継続していることもあって、評者は著者の論攷の大半に目を通してきた。それでも、彼の研究の全体像を見直す機会を改めて与えてくれたという意味で、本書は有用だった。

第2の、より重要な意味として、スーフィズム研究の包括的な展開を示す地図としての役割も本書はもっている。これまでに、概説などの形で著者はスーフィズムの全体像を示してきたが、¹⁾より専門的な水準で、従来の研究が前提としていた枠組みをさまざまに批判しながら新たな全体像を提示しようとしている点で、本書は挑戦的な見取図を示している。著者のこれまでの研究活動のなかで、すでにいくつかの論点は、広く受け入れられているが、改めてそれらがまとまった形で示されていることの意義は大きい。

本書は以下のように構成されている。

序章

第1部：スーフィズムへの視座

第1章：スーフィズム研究の歴史と潮流／第2章：スーフィズムの分析枠組

／第3章：スーフィズムの歴史

第2部：神秘主義としてのスーフィズム—存在一性論学派を中心に

第4章：イブン・アラビーと存在一性論学派／第5章：存在一性論学派の顕現説における「アッラー」の階位／第6章：存在一性論学派における存在論と完全人間論—ジューリーを中心に／第7章：存在一性論学派の地域的展開と地域的偏差

第3部：民間信仰としてのスーフィズム—聖者信仰をめぐる

第8章：イスラーム聖者の二系列—スーフィー聖者と非スーフィー聖者／第9章：イスラームの聖者論と聖者信仰—イスラーム学の伝統のなかで

第4部：イスラームのなかのスーフィズム—その位置づけをめぐる

第10章：マムルーク朝初期のタサウウフの位置づけ—イブン・タイミーヤの「スーフィズム」批判を中心として／第11章：マムルーク朝末期におけるタサウウフをめぐる論争—ビカーイー・スユーティー論争を中心に／第12章：スンナ派とスーフィズム—ワッハーブ派への反批判をめぐる

終章：「多神教」的イスラーム—スーフィー・聖者・タリーカをめぐる

本書で、著者はあくまでイスラーム思想の研究者としての節を守っている。その分野に特化する限りでは、おそらく第2部と第4部、とりわけ第11章などは読み応えのある

1) 本書 pp. 283-284 に掲げられた著者の論攷以外にも複数がある（[東長 1996, 2010a, 2010b] など）。

章であるだろう。専門外の私にとっても、その整序された書きぶりは十分に理解可能であり、論理の運びようは、なるほどとうなずかされるものだった。

しかし、専門へのこだわりは著者の場合、過度に些末な事実に拘泥して、その事実を大きな構図のなかに位置づけるための展望を欠いたり、専門外分野での研究動向から目を背けたりすることとは無縁である。理論的展望の点からいえば、第2章で2つの枠組みが提示される。そのうち、より重要なのは、「スーフィズムの三極構造論」である。スーフィズムを神秘主義、道徳、民間信仰の3つの軸からなるものとして捉えるこの提案は、神秘主義に偏った形でのスーフィズム理解に反省を迫る点で効果的である。スーフィズムが常にこれらを要素として内包するという誤解を招く可能性はあるが、スーフィズムの歴史を概観する第3章に示される事例や、第2部と第3部の対照関係に目を配り、また、終章末尾の印象的な数頁（pp. 264-266）を読むならば、この議論がむしろスーフィズムの柔軟なありようを示すものであることがはっきりと理解されるだろう。

もうひとつ、評者自身が概念の提唱に関り、本書で「スーフィズム・タリーカ・聖者信仰複合現象」として取り上げられている概念も、理論的見通しとして重要である。この概念も、スーフィズムやタリーカ、それに聖者信仰が常に相伴しているとみる考え方だと誤解されることがときにあるが、「複合」であるからには、それらが元来は別個の事象であるとみなされている点に注意を払う必要が

ある。加えて、「複合現象」論はスーフィズムをひとつの要素とする複数の事象の構造的関係を問題とし、「三極構造」論はスーフィズム研究の総体を捉えようとする観点からの提案であり、この2つが単純に重なり合うような受け取り方をしないよう気をつけなくてはならない。

三極構造論との関係から、神秘主義としてのスーフィズムに注目する第2部では、著者の主要な研究対象であるイブン・アラビーと、彼に端を発するとされる存在一性論学派が取り上げられる。第4章でのイブン・アラビー自身の思想と存在一性論学派の思想との間に存在しうる落差や、「学派」という概念自体への反省的理解から始まり、第5章でのカーシャーニーとジーリーによるイブン・アラビーの思想の消化と体系化の異同、さらに第6章ではジーリーを例に取った存在一性論と完全人間論との弁証法的な関係、第7章では存在一性論の各地への展開と、展開先での知的伝統との相互影響が取り上げられる。評者にこの第2部の真価を判断する力があるかは心許ないが、一個人に始まる思想的営為の時空を超える展開を広く深く捉えていくための、多彩な着想に刺激を受けながら読むことができた。

この第2部と、民間信仰を聖者崇敬に代表させて論じている第3部との間に、道徳としてのスーフィズムを扱った数章が置かれるならば、さらに均整の取れた構成が実現できたところであろう。本書ではところどころに見通しは示されている（pp. 248, 250-252 など）ものの、道徳としてのスーフィズムは

まとまった形では議論されていない。これは分野としての研究蓄積の少なさによるものであろうかと推察されるが、今後、著者がこの分野についても研究を深め、その成果を公にすることに期待したい。

第3部は聖者を取り扱うが、民間信仰そのものを取り上げるわけではない。著者は思想研究者としての立場を崩すことなく、聖者に関するムスリム知識人の著作を取り上げることで、思想研究から民間信仰としてのスーフイズム研究への接点を探求している。第8章と第9章を通して、聖者崇敬の基盤たる聖者への信仰自体が民衆に限定された発想ではないことが明らかにされる。第8章では聖者論に2つの系統（第9章での言い方を先借りすれば、スンナ派神学のワリー論とスーフイズムのワリー論）があることを明らかにし、第9章ではさらにシーア派のイマーム論、サイド・シャリーフ論をこれに加えることで、イスラームの枠内で人が聖性を帯びる議論をより包括的に議論の俎上に載せてみせている。

同時に第9章では、バラカ（恩寵）やマウリド（聖者祭）といった、思想的には議論されることがない概念の取扱いについて、それが否定や黙認に限らず、当然視されるがゆえに論じられないという可能性の指摘が目される。それらは評者の専門である人類学の聖者崇敬研究では中心的な概念であり、えてしてそれらを、イスラームに教義的基礎をもたない土着的、あるいは非イスラーム的概念であると位置づけてきた人類学の先行研究があつて、それらへの反省は、評者のなかでも

大きい。

第4部は、スーフイズム批判を見直す3つの章からなる。それらはいずれも異なる論争を取り上げながら、マムルーク朝初期、末期、そして19世紀の論争のいずれにおいても、タサウウフそのものの否定はみられなかったことを指摘する。これによって、スーフイズムがスンナ派のイスラームの不可分の一部となっていたことが明らかになり、同時にワッハーブ派を含むサラフィー主義の発想の異様さが際立つ。構成的にも第4部は見事である一方、イスラーム全体のなかでのスーフイズムの位置づけを論ずるという展開については、三極構造論、複合現象論に加えて、第2章でこれを見通す理論枠組みが提出されていれば、さらに本書全体の理解が進んだように感ぜられる。

以上に述べてきた以外にも、通説に対する多くの批判を含む本書が読者を啓発するところは多々あるが、本書全体について、なお書いておくべきと思われることを3つ、最後に簡単に述べておきたい。ひとつは、広範囲に目配りの効いた本書を読んだうえで、著者の狭い意味での専門であるイブン・アラビーおよび存在一性論学派により特化した単著をぜひ近々に読みたいという希望であり、もうひとつは著者がこの道に入るその当初に志していた神秘主義一般のなかでのスーフイズムという研究の展開も、今後にはありえるかという期待であり、最後は著書によって示された学際的な視点に対して、方法論的にも、目指す一般化のありようについても異なる人類学や歴史学が、どのようにこれに対応

し、接合し、より豊かな研究を生み出しうるかを考える必要があるという、こちらは読者の側に突きつけられた課題の自覚である。

引用文献

東長 靖. 1996. 『イスラームのとらえ方』 山川

出版社.

- . 2010a. 「スーフィズムの成立と発展」
佐藤次高編『イスラームの歴史1—イスラーム
の創始と展開』宗教の世界史11, 山川出版社.
———. 2010b. 「スーフィー教団の革新と再生」
小杉泰編『イスラームの歴史2—イスラーム
の拡大と変容』宗教の世界史12, 山川出版社.